

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

滋賀県米原市

○学校名

滋賀県立米原高等学校

○学校のURL

<http://www.maibara-h.shiga-ec.ed.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各5学級(1学級は英語コース)、
【理数科学級】全学年各1学級、【合計】18学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】716人(平成28年11月1日現在)
(内訳:1年生239人、2年生242人、3年生235人)

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績(実施年度及び事業の別)

記載事項なし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「自他の人権を尊重する生徒」「自分の能力を發揮して自己実現を図る生徒」
「人と人とが豊かにつながり共に生きようとする生徒」

【人権教育に関する目標】

「真実と正義を大切にして人権感覚を高め、人権問題についての正しい理解・認識を培い、差別やいじめを許さない人権尊重の実践的態度を育成する」
「生徒は個人として尊重され、本来持っている個人の能力を發揮し自己実現が図れるように、教科及び教科以外の指導において、生徒一人一人の学力向上をめざす指導の充実に努める」

○人権教育に係る取組一口メモ

学期ごとのLHRを中心に、人権学習を系統的に推進している。その際、HR討論等生徒の自主的な取組を重視している。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・本校の教育活動すべてを通じて実践する。
- ・一人一人の人権が尊重され、生徒同士がその能力の伸張が図れるよう集団づくりに取り組み、民主的な思考力・行動力を実践的に育成する。
- ・生徒が自主活動を通じて自己実現を図り、かつ他人に対する思いやりの心を高められるよう、指導体制を整え、自主活動の一層の進展を図る。
- ・保護者、地域、関係機関との連携を重視する。

3. 実践事例の内容

【1】各学年の人権教育目標

- 1 学年 「多文化共生」及び「情報モラル」等を学び、同じ人間として他人を尊重するとともに自尊感情を高め、豊かな感性を育み、様々な人権問題の学びへと発展させる。
- 2 学年 「部落問題」「進路保障の取組」等を学び、差別の不合理性について認識を深め、人権獲得の歴史と人びとの生き方に学び、身の回りの課題解決に向けた実践的態度を育む。
- 3 学年 「外国人問題」「共生」等を学び、多様な価値観や生き方に触れ、社会や人とのかかわりを通して、互いに認め合い共に生きる社会を構成する者としての実践的態度を育む。

【2】「多文化共生」に関わる取組（学校行事、総合的な学習、LHR等）

国際化の時代というものの、本校の生徒たちが日常的に外国人とふれあう機会が少ない。様々な外国人をめぐる問題にも無関心な生徒が多いのが実情である。授業等での知的な理解に止まらず、修学旅行や総合学習での体験的な学習を重視して、理解の深化を図っている。

- ① 全学年 台湾の高級中学校を迎えての交流学习。
- ② 1 学年 総合的な学習。県内ブラジル人学校訪問、交流学习。
- ③ 2 学年 台湾への修学旅行。台湾の高級中学校を訪問、交流学习。
- ④ 3 学年 人権LHR「多文化共生をめざして」
(外国にルーツがある方を講師に迎えての講演)

①台湾新店高級中学を迎えての交流学习

ア 取組のねらい

国際化が進む中で、人種的・民族的偏見や差別のおかしさに気づき、異文化理解に努め、良好な関係を築いていこうとする意識の高揚に努める。

イ 取組を始めたきっかけ

本校では平成13年度に英語コースを設置して以来、国際理解教育を重視してきた。平成23年度に台湾への修学旅行を企画する中で、取組の柱の1つに交流学习を位置づけることになった。台湾の高級中学校との姉妹校提携については、平成26年12月に実現、昨年度は初めて相互の交流学习を行った。

ウ 取組の主体や実施体制

教務課、生徒課（生徒会）、学年（中心は2年）、国際交流委員会

エ 取組の内容（昨年度の取組事例。今年度は台湾の高級中学校の都合で中止。）

平成27年5月27日、台湾の高級中学校より生徒35名、引率教員6名が来校。

- ・ 11時35分～12時25分 対面式（体育館。全校生徒が参加。）
学年ごとの歓迎パフォーマンス、台湾の高級中学校生徒によるパフォーマンス等。運営は本校生徒会、2年生交流実行委員。
- ・ 13時20分～14時10分 交流会（セミナーハウス。交流実行委員が参加。）
交流実行委員が企画。ゲーム、日本文化体験等で交流を深める。
- ・ 14時20分～15時10分 授業体験（1，2年の授業に参加）。
- ・ 15時30分～16時20分 部活動体験（見学、及び参加）。
茶道部、華道部、剣道部、地学部、美術部中心に参加。



台湾の高級中学校の生徒たちは、授業や部活動体験にとっても積極的であった。本校の生徒たちからはその姿勢に賞賛の声が上がり、自分たちも見習いたいとか、秋の修学旅行で再会が楽しみだ等の感想が寄せられた。一行を見送るころには、あちこちで別れを惜しむ姿が見られ、高校生同士の交流が促進されたことを実感した。

② 1 学年 総合的な学習の時間

「国際文化コース」を選択した生徒40人が、県内のブラジル人学校（幼児から高校生まで40人余り在籍）を訪問。平成28年度は、運動会を通しての交流となった。



(生徒の感想から)

- はじめはポルトガル語での会話で、何を話しているのかわからなかったけれど、身振り、手振りから何を相手に伝えたいのか少しわかった。そこで、言語の違い、文化の違いの問題を解決する方法が見えてきたと感じた。
- 運動会といっても、日本の学校とはちがって、普通の体育の授業みたいな感じだった。設備が整っていないため、できることが限られている現実を感じた。プリントで学習したブラジル人学校が抱えている問題がよくわかった。
- 子供たちは、仲がよく個性的で明るかったことが印象的だった。先生がもう少しの方がいいと思った。お金のことや職員不足などもっと支援が必要だと感じた。

③ 2 学年 台湾への修学旅行。

今年で5年目（11月中旬～12月初旬に実施）。1年目より現地の台湾の高級中学校を訪問し、交流を深めている。



今年度の両校の交流は、修学旅行2日目の平成28年11月16日（水）午後に行われた。13時30分から全体での歓迎会があった。両校の校長・生徒代表の挨拶の後、学校紹介、記念品交換などが行われ、各校のパフォーマンスが披露された。本校の和太鼓演奏と合気道の実演は会場を大いに盛り上げた。最後に両校の校歌を合唱して全体会を終えた。14時30分からは17のグループに分かれての交流会であった。グループごとに飲物やお菓子が用意され、ゲームをする班、ダンスをする班、語り合う班など和やかに交流が進んだ。

今年の交流で印象的であったのは、本校生徒が例年以上に積極的に参加できたことである。苦勞しながらも英語で語り合い、一緒にダンスやゲームに興じる姿がみられた。台湾の高級中学校がどんな学校であるかを知り、簡単な台湾語を覚えるなど、事前学習の成果が現れたのではないか。日本と台湾の高校生が、お互いに、今何に興味を持ち、どんな生活を送っているのかの情報交換ができたよい機会になった。16時30分に学校を出発するころには、写真を撮りあい、再会を約束する姿が見られて、交流の深化がうかがえた。

④ 3 学年 人権LHR「多文化共生をめざして」

外国にルーツがある方を講師に迎えての講演

ア 取組のねらい

1年の総合学習や2年の修学旅行の取組の中で、異なる言語、宗教、習慣等の文化を互いに尊重し合いながら、「ともに生きること」を追求する意識や姿勢は、育ちつつある。特に言語への関心は強く、中国語やポルトガル語に関心を持つ生徒も出てきている。

一方、職場や学校、地域社会など日常生活の場において様々な軋轢が生じ、外国人に対する人権侵害につながっている現状があるが、そのことに関心を持つ生徒はまだ少数である。「外国人問題」についての講演を聴いて、在日外国人のおかれている現状や、異文化に対する理解を深め、多文化共生社会を実現する精神、行動力を育成する。

イ 取組のまとめ

平成28年5月20日(金)に行われた今年度の講演では、講師が9歳のときに来日してからの様々な体験が具体的に示され、講師の思いが率直に生徒に向けて語られた。

- ・小学校5年生のときに級友から差別的なことを言われた体験。そのときの担任の先生が理解のある先生で、ブラジルの文化について特別な授業を設けてくれてクラスの雰囲気が変わったこと。
- ・中学に入学してピアスをつけて登校し、厳しい指導を受けた体験。ピアスは、自分たちにとってお守りの意味を持つ。文化の違いを理解した上での指導であってほしいこと。
- ・大学を卒業したあと、外国籍の子供たちの居場所づくりに関わる仕事を選んだこと。
- ・日本人外国人の区別なく、どの子に対しても思いやりの心をもって接してほしいこと。「外人」と言う表現は、人を傷つけることがあるので、「外国人」と表現してほしいこと。同じ人として、ありのままの私たちを受け止めてほしいこと。

(生徒の感想から)

- 僕はみそ汁をくさいと思ったことはないが、台湾の料理をくさいと思うことがあった。それを思い出しながら話を聞いていた。僕は、学校のルールより文化の違いを理解することの方が大切だと思った。
- 同じ地球でも国や民族の違いで全く生活スタイルや食事がちがっていて、他の国に行けば、行った人が適応しなければならないところはあると思うが、受け入れる側も相手の文化を受け入れ、むしろ興味を持てるようになるとよいと思った。
- ピアスの話が印象に残った。中学校の時、2学年下の学年にフィリピン人の子がいた。学校は認めていたが、生徒はその意味がわかっていない人が多かった。なかには「調子に乗ってる」と言っている人もいた。文化の違いを認めることは大切だと思った。

- 外国人というだけで壁を感じて言葉が通じないんだ、とってしまったけど、そういう壁を壊して仲良くなりたい！という言葉以上のものが大切なんだなと思った。それは外国人の方だけでなく私たちが関わっていくすべての人に共通することだなと思った。
- 私にもブラジル人の友達がいる。彼女は家ではポルトガル語のみで会話し、私と話すときは少しの片言の日本語で話してくれる。彼女は小学校のころ全然日本語が話せなくて、いじめにあったと話してくれた。しかし、今私たちは片言の日本語だけでも十分親しくなれている。言語以外のコミュニケーションが大切だと改めて教えていただいた。
- 参政権の話に衝撃を受けた。日本に何年も住んでおられる人たちの選挙権の問題をもっと真剣に考えるべきだ。

【3】教科での取組

- ア 現代社会(1年)・政治経済(2年文系)
「基本的人権の性格と平等権」(1時間)「高度情報化社会の課題」(1時間)
- イ 日本史(3年文系)
「近代日本の植民地支配」(1時間)「在日韓国・朝鮮人問題」(1時間)

(生徒の感想から)

- 日本の植民地支配は、日本語の強制、神社信仰の強要、創氏改名など徹底した同化政策とセットであったことがわかった。同化政策は1, 2年で学んだ多文化共生の対極にある考え方だ。ヘイトスピーチの根っこにも同化の強要があるように思う。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

- ① 台湾の高級中学校を迎えての交流学习は、5月下旬。本校では5月中旬に中間試験が終わり、6月初旬は春季高体連の時期で、生徒にとっても、教員にとってもゆとりのない時期。また今年度は、新店高級中学の都合で急遽取りやめとなった。相互の年間行事をすりあわせる中で、より適切な時期を模索する必要がある。
- ② 現代社会や政治経済の授業でヘイトスピーチを扱うとき痛感するのは、日本の近現代史、特に植民地支配の実態の理解が不十分であるということである。日本史では、今後も地域の教材も掘り起こしながら生徒が興味関心を持つ授業に努めていく必要がある。
- ③ 保護者から「インターネットで流される人権侵害につながるような言説、ヘイトスピーチ等を子供たちは無批判に受け止めてしまわないか。情報教育を充実してほしい。」との要望もあり、3年前から1年の1学期「情報」の時間の中で、「情報と人権」をテーマにした特設授業に取り組んでいる。

5. 実践事例の実績、実施による効果

ブラジル人学校訪問で、ブラジル籍の子供たちが置かれている深刻な状況を初めて知ったとする生徒が多い。この取組が契機となり、募金活動等のボランティア活動に自主的に取り組む生徒の姿も見られた。

また、修学旅行に行くまで、一面的な報道の影響も受け、台湾や中国など近隣の国々に対して偏見を持っている生徒も少なくなかった。それが交流の中で、台湾の高級中学校の生徒たちの主体的、積極的に学ぶ姿勢、語学能力の高さなどに強い刺激を受けたり、他文化に触れ、知ることにより自身の感覚が豊かになったと感じたりする生徒が多く見られた。

3年の講演や日本史の学習を通し、「日本の社会は、他の国に比べ、移民が少なく同じ文化を持つ人が大半だ。だから同じ日本人の中でも少しずれた行動をすると、変人扱いされる。学校では、いじめがあったりする。外国籍の人たちが住みよい社会は、日本人にとっても住みよい社会であるはずだ。ちがいが認められる社会であって欲しい。」など、多様な価値観を持ち、共生していくことの大切さに気付くことができた。3年間にわたる体験的な学習を通して、外国籍の人たちの問題を他人事でない、自分たちにも関わる身近な問題としてとらえる姿勢が育ってきている。

6. 実践事例についての評価

- ・取組のあとには振り返りシートで、生徒に取組の評価、コメントを求めている。成果と課題を明らかにして、次の実践に生かしている。
- ・保護者懇談会や通信等により、行事やLHRの取組を広報し、啓発を行っている。また、保護者の声に耳を傾け、次の実践に活かしている。
- ・多文化共生や外国人問題について、系統的・継続的な取組を通し、多様な価値観や異文化尊重の意識が育ってきた。また、学年が上がるにつれ、外国語への関心も高まり、高い意識と興味をもって学ぶ姿も見られるようになってきた。
- ・生徒が外国にルーツがある子供たちのために、自主的に募金活動を始めるなど、身の回りの人権課題の解決に向けた実践的行動が見られた。こうした行動が広がり、学校の風土となるよう教育活動を継続、改善していく必要がある。